

205 特発性肺線維症 (IPF) 症例における肺癌の合併について—開胸肺生検例と剖検例の検討から—

京都大学胸部疾患研究所第二内科¹, Mayo Clinic, Surgical Pathology²

○北市正則¹, 江村正仁¹, 西村浩一¹, 長井苑子¹, 大島駿作¹, 泉孝英¹, Thomas V. Colby²

目的：特発性肺線維症 (idiopathic pulmonary fibrosis, IPF) における肺癌の合併について検討した。

対象と方法：京大胸部研に1966年から1988年に初診した症例の中で、開胸肺生検もしくは剖検が施行された症例を検討した。IPFの病理像である usual interstitial pneumonia (UIP) の判定は1978年のCarringtonの記載に従った (New Eng J Med 298: 801-809)。剖検症例では、UIPと判定できた開胸肺生検症例に認められた所見に準じて、慢性経過の肺病変の判定を行った。

結果：

(1)57例 (開胸肺生検46例, 剖検21例) をIPF/UIPと判定できた。男性44例, 女性13例で初診時平均年齢は57.8歳 (37~70歳) であった。

(2)開胸肺生検1例と剖検4例 (19%) の5例 (8.7%) に肺癌の合併を認めた。これらの5症例は全員男性で喫煙者であった。初診時年齢は平均56.4歳 (49~65歳) で、剖検の4例では初診から死亡までの期間は平均47カ月 (11~97カ月) であった。

(3)肺癌の発生部位は右上葉2例, 左上葉2例, 左下葉1例であり、組織型は類表皮癌1例, 腺癌4例であった。

まとめ：IPFと判定された59症例のうち、肺癌合併の5症例は全例、男性喫煙者であり、注目された。

207 特発性間質性肺炎合併肺癌自験例の検討—“定型例”と“非定型例”とによる相違を中心として—奈良県立医科大学第二内科¹, 腫瘍放射線科²

○福岡和也¹, 春日宏友¹, 中尾幸子¹, 森川暁¹, 阿児博文¹, 長澄人¹, 渡辺裕之¹, 鴻池義純¹, 米田尚弘¹, 堅田均¹, 澤木政好¹, 成田亘啓¹, 今井照彦², 大石元²

目的：特発性間質性肺炎 (以下IIP) と肺癌の関連性を調べるため、IIPを定型例と非定型例に分け、背景因子、組織型、病期、発生部位などを比較検討した。対象および方法：当科においてIIPに肺癌を合併した15例 (男性13例, 女性2例, 平均年齢69歳, 定型例8例, 非定型例7例) を対象とした。

成績：1) 平均年齢は定型例72歳, 非定型例66歳, 平均喫煙指数は両群とも1000以上で、粉塵曝露歴も高頻度であった。2) 組織型について定型例では扁平上皮癌6例, 腺癌2例であったのに対し、非定型例では扁平上皮癌3例, 腺癌1例, 小細胞癌3例であった。病期は両群とも進行例が多かった。発生部位は両群とも末梢肺野発生が多かったが、上肺野/下肺野の比率は定型例2/6, 非定型例6/1と両群間で逆の分布を示した。3) IIPと肺癌の位置関係についてIIP病巣内に肺癌を認めた例は定型例で7/8, 非定型例で3/7であった。

考察および結論：IIP定型例に発生する肺癌は下肺野の間質性病変が既に存在する部位から発生するものが多く、逆に非定型例では上肺野に多く、必ずしも間質性病変を発生母地としない傾向が示された。

206 特発性間質性肺炎に合併した肺癌の検討

岩手県立中央病院呼吸器科¹, 岩手医大第1病理²
○武内健一¹, 伊藤利治¹, 金山広海¹, 吉田司¹, 富地信和²

目的：特発性間質性肺炎 (idiopathic interstitial pneumonia: IIP) に肺癌が合併する例がしばしばみられ、本症の予後を決定する重要な因子であることはよく知られている。しかし、その原因については喫煙、呼吸細気管支領域の扁平上皮ないしは腺様化生などの病理形態学的変化が密接に関係していると言われているものの、いまだ不明な点が多い。そこで今回私達はIIPと肺癌合併例について、臨床的、病理組織学的検討を行った。

対象および方法：IIPと肺癌がたまたま同時に発見された症例4例, IIPの経過中に発見された症例1例, IIPと肺結核が合併し、その経過中に肺癌が発見され手術を行った1例について、喫煙、肺癌原発部位、組織型、IIPの病変の拡がり、腫瘍マーカーなどの関連を検討した。

結果：全例男性で平均年齢72.5歳, 原発部位は右下葉4例, 中葉1例, 左上葉1例, 組織型は小細胞癌3例, 腺癌2例, 扁平上皮癌1例であった。6例中5例は喫煙者, 1例は非喫煙者であった。IIPの拡がりは病型Ⅲを示す例が多く、腫瘍マーカーは一定の傾向はみられなかったが、小細胞癌ではNSEが、腺癌ではCEAが高値を示した。

208 特発性間質性肺炎合併肺癌の検討

長崎大学医学部第2内科
○木下明敏, 広瀬清人, 谷口哲夫, 早田宏, 力竹輝彦, 鶴川陽一, 神田哲郎, 原耕平

昭和50年から63年までの14年間に当科に入院した特発性間質性肺炎 (IIP) に合併した肺癌症例について検討した。原発性肺癌は590例で、このうちIIP合併肺癌例は13症例 (1例は重複癌) あった。またIIP症例は38例経験した。IIP合併肺癌群では、男性12例, 女性1例と圧倒的に男性に多く、平均年齢68.0歳と高齢者に多く、また全例喫煙歴があった。IIP合併肺癌群の肺癌の発見動機は、胸部異常陰影によるもの5例, 自覚症状によるもの8例で、IIP発見から肺癌発見までの期間は、36.5 ± 23.5カ月であった。原発部位は、左肺 (64%) および末梢肺野 (79%) に多く、上下葉間に差はなかった。組織型は、扁平上皮癌と腺癌が多かった。病期は、Ⅲ, Ⅳ期の進行したものが多かった。またIIP症例のうち肺癌合併群と肺癌非合併群に分けて比較検討を行った。自他覚所見では、肺癌合併群の体重減少およびバチ状指の割合が肺癌非合併群に比べ高かった。また検査所見では、CEA, ESR, CRPが肺癌合併群で高値を示し、特に血清CEAが5ng/dl以上のものは、肺癌合併群に有意に多かった。IIP症例の経過観察にあたっては、胸部X線、胸部CTのみならず、喀痰細胞診や血清CEAなども定期的に調べる必要があると考えられた。